

サクマ・シャルガイ

1. 事業実施の目的

国際人類学民族学科学連合（IUAES）2019年中間会議での成果発表

2. 実施場所

ポーランド、ポズナン市

3. 実施期日

令和元年8月24日（土）～ 令和元年9月4日（水）

4. 成果報告

●事業の概要

申請者は口頭発表をするために、2019年8月27日から8月31日にかけて国際人類学民族学科学連合(IUAES)2019年中間会議に参加した。該当の会議は、ポーランド民族学会とアダム・ミツケヴィチ大学の主催により、「人間同士の連帯」をテーマに、ポーランドのポズナン市で開催された。

**2019年8月27日（火）**は、アダム・ミツケヴィチ大学の本部で行われたオープニングセレモニーに参加し、日本、ポーランド、ロシアなどからの研究者と交流した。

**2019年8月28日（水）**には、移民研究に関する方法論や最新の研究動向を把握するため、申請者は、自身の研究テーマに最も近い第25パネル「観光、移民、難民の交差点（The Intersections of Tourism, Migration, and Exile）」に参加した。このパネルの趣旨は、人間の移動を観光、移民、難民というカテゴリーに分けず、共通点を見つけ、総合的に把握しようというところにある。申請者は、5人の発表を聞いて、活発な議論に参加した。具体的には、申請者の研究対象である日本のサハリン帰国者に対する政策を比較するため、申請者は、アルメニアにおけるポーランド人のディアスポラというテーマで発表したエベートースカー氏に対し、ポーランドにおける帰国政策について質問した。そして、彼女からポーランドにおける帰国政策の現状に関する情報を得ることができた。

**2019年8月29日（木）**には、移民研究に関する新しいアプローチを知るため、申請者は、第31パネル「将来と移民（Migrating and/as Future-making）」の発表を聞いて、議論に参加した。このパネルの発表者は、移民の動向を把握するにあたっては、移民の将来への意識に着目することが重要であると出張した。中国国内の若者移民に関する研究を行っているブリュッセル自由大学のリショード氏に、申請者は、若者の中国国内の移動においてメディアの果たす役割について質問した。発表者によると、メディアで放送されている西洋の生活様式は、その若者の移動の一つ要因であるということであった。

申請者は、上記に述べたパネルを通して、グローバルやローカルなレベルでの移民過程、そして移民に関する新しい研究方法について知ることができた。

2019年8月30日(金)には、第61パネル「現実社会とサイバー空間との関係性の再考 (Rethinking the Relationships between Real Societies and Cyberspaces)」で博士論文に関する「インターネット使用におけるサハリン永住帰国者の高齢者と若者の違い (The difference in the usage of internet between old and young generations of Sakhalin repatriates in Japan)」というテーマで口頭発表した。

2019年8月26日(月)、9月2日(月)には、ポーランド国立図書館でポーランドの帰国政策に関する文献を収集した(文献リストは別紙参照)。

#### ●学会発表について

申請者は、第61パネル「現実社会とサイバー空間との関係性の再考 (Rethinking the Relationships between Real Societies and Cyberspaces)」で「インターネット使用におけるサハリン帰国高齢者と若者の違い」というテーマで口頭発表した。

本発表では、“polymedia” (Madianou & Miller 2012)、“digital divide” (Deursen & Helsper 2015)という理論、また“new visibility” (Thomson 2005; Mateus 2017)という概念に基づき、サハリン帰国者である第二世代と第三世代を代表する二つの事例を比較し、仕事におけるインターネット使用の違いについて議論した。

結論として以下の三つ点を取り上げた。

1) サハリン帰国者の第二世代にとって、現在、日本での仕事におけるコミュニケーションは、基本的に帰国する以前のロシアで構築されたネットワークに基づいている。インターネットは、主に海外にいる親戚・友達・知り合いと連絡するため使われている。それに対し、第三世代にとって、日本での仕事におけるコミュニケーションは、インターネット上で構築されたネットワークに基づいている。

2) Polymedia理論の中でMadianouとMillerの二人の研究者は、インターネット上のメディアに国境はないということを指摘した。しかし、申請者は、サハリン帰国者のインターネット使用の事例から、彼らがメディアを選択する際に文化的境界が存在することを明らかにした。すなわち、彼らは、言語や文化的要素により、メディアを選択していることが見てきたのである。

3) インターネット使用におけるサハリン帰国者の第二世代と第三世代の違いの要因としては、メディア・リテラシーのほかに、各世代に対する日本政府の支援制度の違いや日本語能力の違いなども考えられる。

本発表について、指定討論者であったDong Ju Kim教授(韓国科学技術院(KAIST))から以下のような有益なコメントを頂いた。具体的には、Dong Ju Kim教授は、サハリン帰国者のメディア使用とコミュニケーションのあり方を考察する場合、トランスナショナルな関係だけではなく、サハリン帰国者と日本地域社会との関わりからアプローチすることをアドバイスして下さった。申請者は、後期の論文ゼミ発表(サハリン帰国者のコミュニケーションとメディア使用)において、サハリン帰国者と日本地域社会との関わり方についてより深く考察する予定である。

## 参考文献

Deursen A.J.&Helsper, E.J. (2015) A nuanced understanding of Internet use and non-use among the elderly. *European Journal of Communication* 30(2) : 171-187.

Madianou, M.&Miller, D. (2012) Polymedia, Communication and Long Distance Relationships. *International Journal of Cultural Studies* 15(5): 1-19.

Mateus, S. (2017) Visibility as a key concept in Communication and Media Studies. *Estudos em Comunicação* 25( 2), 109-124.

Thompson, J. B. (2005) The new visibility. *Theory, Culture and Society*, 22 (6): 31-51.

### ●本事業の実施によって得られた成果

本事業の実施によって得られた成果は三つがある。

1. 国際会議に参加することを通して、グローバルやローカルなレベルでの移民・移動の状況や、それに関する研究成果を把握することができた。
2. 博士課程の研究に対する貴重なコメントを得ることができた。
3. 申請者は、博士論文の第四章の執筆、また、第四章を中心とする後期論文ゼミの発表を準備するため、本発表の内容と結論に関して、有益な視座を得ることができた。

### ●本事業について

国際人類学民族科学連合(IUAES)2019 年中間会議で口頭発表したことを通して、文化人類学界の国際的な傾向、最新の研究方法やフィールドワークの手法について理解を深めることができた。本事業は、博士論文を執筆するために重要な事業であり、今後も引き続き継続されることを強く望んでいる。

## 付属資料

### 文献

[英語]

1. Grzymała-Kazłowska, A. Grzymała-Moszczyńska, H. 2014  
The Anguish of Repatriation: Immigration to Poland and Integration of Polish Descendants from Kazakhstan East European Politics and Societies and Cultures. *East European Politics and Societies and Cultures*. 20(10): 1–21.
2. Iglicka, K. 1998  
Are They Fellow Countrymen or Not? The Migration of Ethnic Poles from Kazakhstan to Poland. *International Migration Review*. 32(4) : 995-1014.
3. Myślicki, M. 2016  
Ukrainians' crisis immigration to Poland – a change for Polish demography? *European Journal of Geopolitics*. 4:68-94.

[ポーランド語]

- Chumak, S. 2018  
Repatriacja jako element polskiej polityki migracyjnej (ze szczególnym uwzględnieniem Azji Środkowej). Praca licencjacka. Uniwersytet Warszawski Centrum Europejskie. p. 1-54.
- Gancarz, A. 2012  
Polacy z Kazachstanu – życie przed i po repatriacji w perspektywie pedagogiki międzykulturowej // Poza paradygmaty. Pedagogika międzykulturowa. T.2. Księga pamiątkowa dedykowana Profesorowi Tadeuszowi Lewowickiemu. (red.) Alina Szczurek-Boruta, Ewa Ogrodzka-Mazur. Wydawnictwo Adam Marszałek: Toruń.
- Masiarz, W. 1997  
Przesiedlenie i repatriacja Polaków z Azji Środkowej w 1946 r. *Zesłaniec* 2: 107-113.
- Ruchniewicz, M. 1999  
Tzw. repatriacja ludności polskiej z ZSRR w latach 1955-1959. *DZIEJE NAJNOWSZE, ROCZNIK*. 31(2):171-177.

[ロシア語]

- Агаджанян, М. 2006  
Репатриация соотечественников: вопросы правового обеспечения и эффективности реализации. *21-й век*. 1(3): 22-46.
- Ковалев, М.П. 2009  
Репатриация как вид миграции: методологические проблемы исследования. *Вестн. Том. гос. ун-та*. 327:42-44.